

# 都会から地方へ移住する人の心理プロセスの研究

1140455 中山 徹

高知工科大学マネジメント学部

## 1. 概要

現在、地域の人口減少によって、地域の過疎化が深刻な問題となっている。これに対して、地域の行政はその問題を解決するために新規定住者を増やそうと対策を講じているが解決には進んでいない。そこで本研究では、移住者の移住以前の暮らしから定住までのプロセスを構築することで、どういった人が移住するのかということ明らかにした。明らかにしたプロセスモデルを梶原町で検証した結果、そのプロセスモデルを適応することができた。

## 2. 背景

現在、少子高齢化が進んだことで地域の過疎化が深刻な問題となっている。それは、地域の人口減少により、基本機能の維持ができなくなっているためである。そのため現在、地域活性化の重要性が高まってきており、地方の行政では、その過疎化を解決するため、他の地域からの移住者を増やし、定住者を増やす政策を行っている地域もあるが、なかなか解決には進んでいない。また、自分の住み慣れた地域を離れて、他の地域へ移住するという事は容易なことではない。さらに、地方で暮らすというというのは、都会での暮らしに比べてリスクを伴うことである。地方での暮らしのリスクというのは、交通の不便、職の少なさ、所得の少なさなどのリスクである。

移住者の研究として【Benson(2009)“Migration and the search for a better way of life: a critical exploration of lifestyle migration”】という論文がある。この論文は初めてライフスタイル移住ということを定義した論文であり、この定義が提唱されるなど、ここ数年「ライフスタイル移住」という、より充実した生活を求め、移住する人達がいるということについての研究が注目を浴びてきている。

## 3. 目的

本研究では、移住者の移住前の暮らしから定住までのプロ

セスモデルを構築することを目的とする。このプロセスモデルを構築することで、移住者が、移住時にどのようなきっかけで移住を決断し、その意思決定にどのような人の特徴や人生経験が関係しているのかということ明らかにしていく。また、ある地域 A で構築したプロセスモデルを、ある地域 B で適用し、そのモデルの汎用性を検証する。

## 4. 研究方法

### 4.1 データ収集方法

島根県隠岐郡海士町に移住して来ている方達 6 人と、高知県高岡郡梶原町に移住して来ている 4 人の方達に聞き取り調査を行った。

島根県隠岐郡海士町を対象地とした理由は、定住政策により、約 5 年半で新規定住者がおり、定住政策に成功し豊富な聞き取り調査データを集めることができるからである。

次に、高知県高岡郡梶原町を対象地とした理由は、現在新規定住者を増やそうと政策を行っている所であり、新規定住者を増やそうとしている地域であり、海士町という離島における移住プロセスが、中山間地域という全然違う環境の梶原町において、どのような結果になるのかを検証するためである。

### 4.2 調査対象者の概要

島根県隠岐郡海士町の調査

- ・ I 氏と H 氏は海士町の図書館職員の方
- ・ M 氏は農家と自営業をしている方
- ・ K 氏と C 氏は海士町役場職員の方
- ・ S 氏は海士町学習センターで勤務している方

I 氏	2013 年 06 月 28 日海士町の図書館にて約 50 分
H 氏	2013 年 06 月 28 日海士町の図書館にて約 90 分
M 氏	2013 年 06 月 28 日海士町の民宿にて約 90 分
K 氏	2013 年 06 月 28 日海士町役場にて約 30 分

C氏	2013年06月28日海士町役場にて約40分
S氏	2013年06月30日海士町学習センターにて約50分

高知県高岡郡梶原町の調査

- ・T氏は専業主婦の方
- ・Y氏とO氏とR氏農家の方

T氏	2012年09月02日Y氏自宅にて約40分
Y氏	2012年09月02日H氏自宅にて約20分
O氏	2012年09月02日O氏自宅にて約20分
R氏	2012年09月02日R氏自宅にて約20分

#### 4.3 分析方法

聞き取り調査をした10名の被験者の書き起こしデータの結果から、グラウンデッド・セオリー・アプローチという手法を用いて、それぞれの被験者の移住後の定住までのプロセスを抽象化し、図にまとめた。グラウンデッド・セオリー・アプローチとは、「ひとまとまりの社会的現象において、社会や他者との関わりのなかで、その人が自分の経験をどう意味づけるのか、どう感じるのか、そしてそれに基づいてどう行動するのかを複数のカテゴリーを使って包括的に捉えようとするものである。」(戈木,2008,p.6) この手法を用いることで、移住者の移住前暮らしから、移住先で定住するまでのプロセスを図化することで、どのような特徴を持つ人が移住から定住まで進むのかということを明らかにした。

#### 4-3-1 分析の手順

##### 1 ラベル名を付ける

収集した聞き取り調査データ書き起こしを行い文章化する。その文章化したデータの研究対象者が話した部分をできるだけ細かく分断していき、分断したそれぞれの部分に対し、その内容を抽象化した1つの名詞(ラベル名)を付けていく

##### 2. カテゴリーを作る

似たラベル名同士になったものを集めていき、1つのカテゴリーとして、さらに抽象化したカテゴリー名を付けていく。

##### 3. カテゴリーを現象ごとに分類する

カテゴリーを実際に行った「行為」と、行為に対して作用する(状況・条件)どちらに当てはまるかを分類する。

#### 4. カテゴリー関連図の作成

作成したカテゴリーを1つの図にまとめる

### 5. 分析結果

#### 5.1 ラベル名付けの結果

海士町の6名の聞き取り調査結果の結果を書き起こし、細かく分断しラベル名を付けていき、結果、合計227個のラベル名が抽出された。

##### 5.1.1 ラベル名の抽出の例

ラベル名の抽出によりどのようなラベル名付けの結果になったのか、一部の例を紹介していく。抽出されたラベル名は

【I】の中に囲んだ。

##### ・S氏におけるラベル名の抽出

S氏に対する聞き取り調査を行った一文の紹介である。次の文は、質問者がS氏の移住の時期や順序を聞き出そうと、移住先の情報はどのようなルートで知ったのかという質問に対する、S氏の答えを引用したものである。

S氏 「フェイスブックっていうのがありまして、Fさんと僕の間にも共通の友人がいたんですけどこの人がシェアのボタンを押したので僕のところにも記事がやってきました。」

(補足 Fさんは移住先の仕事場の同僚)

S氏の回答から、S氏は、FさんがSNSで発信した移住先の情報をたまたまFさんとの共通の友達だった人がシェアしたことで偶然情報を見る機会があったことがわかる。

そのため【SNSによる移住先の情報との偶然の出会い】というラベル名を付けた。

##### ・I氏のラベル名の抽出

I氏に対する聞き取り調査を行った一文の紹介である。次の文は、S氏に対しても行ったように、質問者がI氏の移住の時期や順序を聞き出そうと、移住先の情報はどのようなルートで知ったのかという質問に対する、I氏の答えを引用したものである。

I氏 「でまあちょっと実家に滞在して、その後こ

の海士町の職員の募集を見まして、U ターン I ターンの求人雑誌を見て、でまあ自分の好きなテーマで町づくり関わってみませんかという

I 氏の回答から、I 氏は元々 U ターン、I ターンをしようと考えている中で、自ら求人情報雑誌を読んでいたことによる、移住先の情報との出会いであるため、自ら様々な移住先の情報を探していたということは、偶然が関わっているとは考えられないため【求人雑誌による移住先との出会い】というラベル名を付けた。

このようなラベル名付けを研究対象者それぞれに行った。

## 5.2 カテゴリーの分類結果

ラベル名付けによって抽出された合計 227 個のラベル名の似た物を分類した結果、合計 31 個のカテゴリーの分類ができた。分類したカテゴリーは 1~31 までの番号を振り、□で囲んだ。ラベル名の横の「」は、そのラベル名が研究対象者のどの人から抽出されたものなのかを表している。

### 5.2.2 カテゴリーまとめ

#### 1. 都会暮らしの頃に感じていた違和感

【都会暮らしでの体調の崩れ】「I 氏」

【楽しさと違和感が共存した都会での暮らし】「H 氏」

【都会の人の一部が自然を大事にしないことへの不快感】  
「K 氏」

【見えなかった就職先】「M 氏」

【前の仕事で自然と触れ合う仕事ができずに辞めてしまった夫】「C 氏」

【都会の恵まれた環境で勉強を頑張らない都会の子供への不満】「S 氏」

#### 2. 偶然

【移住先の求人情報との偶然の出会い】「H 氏」

【キーワード検索による高校探索】「H 氏」

【偶然のタイミングでの移住先の役場の方の退職】「C 氏」

【SNS による移住先の情報との偶然の出会い】「S 氏」

#### 3. 自らの価値観の見つめなおし

【自らの価値観の転換】「I 氏」

【子育てがひと段落したことによる自分の生き方の見つめなおし】「H 氏」

【恵まれた環境を活かしていないことの察知】「M 氏」

【子供達に直接勉強を教えたいという願望への変化】「S 氏」

#### 4. 自然のある環境への憧れ

【自然の中で暮らす願望】「H 氏」

【海のある環境での仕事への願望】「K 氏」

【自給自足な暮らしをしたいという願望】「M 氏」

【島暮らしへの願望があった夫】「C 氏」

#### 5. 移住先の情報との出会い

【求人雑誌による移住先との出会い】「I 氏」

【アンテナショップでの移住先の情報との出会い】「H 氏」

【就職サイトでの移住先との出会い】「K 氏」

【大学時代の海士の子供達との出会い】「M 氏」

【移住先の HP での求人情報との出会い】「C 氏」

【SNS による移住先の情報との出会い】「S 氏」

#### 6. 移住先への見学有

【移住先の情報を知った瞬間の見学決意】「H 氏」

【厳しい環境で勉強を頑張っている子供達を見たいという願望】「S 氏」

【移住先で食に関する就職先を探索】「M 氏」

#### 7. 移住先への見学無

【移住先の移住者の多さへの驚き】「K 氏」

#### 8. 転職意思

【社会に貢献できる仕事への欲求】「I 氏」

【経験を活かした就職への強い思い】「H 氏」

【海のある環境での仕事への願望】「K 氏」

【仕事が無ければ移住はできないことの実事確認】「M 氏」

【自分のやりたい仕事の探索】「C 氏」

【勉強に一生懸命な移住先の子供達を応援したいという思い】  
「S 氏」

#### 9. 移住前の移住先へのプラス要因

【好きなことにチャレンジさせてくれる第一印象】「I 氏」

【自分と娘が求める教育がある移住先】「H 氏」

【海に囲まれ自分の求める条件を満たしている第一印象】

「K氏」

【一次産業で生計を立てることの尊さの実感】「M氏」

【心配事の解消に協力的な移住先】「C氏」

【面白そうに感じた移住先の情報】「S氏」

#### 10. 定住意思有の移住決断

【永住することが理想という思い】「H氏」

【永住を決意した移住】「C氏」

#### 11. 定住意思無の移住決断

【永住意思のない移住】「I氏」

【永住意思のない移住】「K氏」

【永住意思のない移住】「M氏」

【永住意思のない移住】「S氏」

#### 12. 家族と離れることへの不安

【親と離れたところに移住するという不安】「H氏」

【将来の親の面倒の心配】「M氏」

【遠くで住む親への不安】「C氏」

#### 13. 家族への事前相談有

【家族への移住に関する事前相談】「H氏」

【家族への移住に関する事前相談】「K氏」

【家族への移住に関する事前相談】「M氏」

【移住することを心配する親】「C氏」

【家族への移住に関する事前相談】「S氏」

#### 14. 家族への事前相談無

【親への相談なしの意思決定】「I氏」

#### 15. 親の放任主義の教育方針

【放任主義の親への感謝】「M氏」

#### 16. 家族の反対

【移住に関する夫婦の考えの違い】「H氏」

【相談時の母の反対】「K氏」

【移住することへの家族の反対】「M氏」

【遠くへ移住することへの親の反対】「C氏」

【移住することへの家族の反対】「S氏」

#### 17. 家族の賛成

【相談時の親の賛成】「H氏」

【相談時の父の賛成】「K氏」

#### 18. 移住の断念

ラベル名無

#### 19. 失敗は人生の糧となるという人生哲学

【失敗は人生の糧となるという人生哲学】「H氏」

#### 20. 口だけでなく体験することを大切にするという人生哲学

【口だけでなく体験することを大切にするという人生哲学】

「I氏」

#### 21. 直観的な感覚を行動に直結させる性格

【直観的な感覚を行動に直結させる性格】「M氏」

#### 22. 移住失敗後帰る場所の存在

【移住に失敗しても迎え入れてくれる親】「C氏」

#### 23. 過去の田舎居住体験

【大学時代の田舎居住体験】「K氏」

#### 24. 移住

ラベル名無

#### 25. 移住後の不便の解消

【ネットという手段による不便さの解消】「I氏」

【人を受け入れてくれる島の雰囲気】「I氏」

【ネットという手段による不便さの解消】「H氏」

【移住者の手厚い受け入れ体制が整った移住先】「H氏」

【移住時の行政のバックアップ】「M氏」

【役場の対応による不便の解消】「C氏」

#### 26. 移住後のプラス要因

【やりがいのある仕事】「I氏」

【移住先で価値観を共有できる人との出会い】「H氏」

【地区のイベントに参加することによる親交の深まり】「K氏」

【結婚もして日々が充実している移住先】「M氏」

【夫の趣味である釣りができる環境】「C氏」

【応援したくなった子供達の存在】「S氏」

#### 27. 移住後のマイナス要因

【近所付き合いの忙しさ】「I氏」

【最初からオープンでは無かった地元民の存在】「H氏」

【フェリーでの時間が掛かることへの不満】「K氏」

【移住者と地元民の不協和音】「M氏」

【田舎暮らしへのネック】「S氏」

28. 定住

ラベル名無

29. 定住できず

ラベル名無

30. 都会への一応の満足

【不満は無く非常に満足度の高かった移住前の仕事】「S氏」

31. 移住の決め手となった人の存在

【応援しなくなった子供達の存在】「S氏」

5.3 カテゴリー関連図

5.2 でのラベル名の分類とカテゴリーの作成結果から、移住のプロセスモデルを構築した。(図 5-1) (図 5-2)

図 5-1、図 5-2 の実線矢印は、移住者のある行動や行為から、次の行動や行為に結びつく可能性を表しており、破線矢印は、その行為や行動に結びつく可能性を高める働きを表している。例えば、8. 転職意思をもった移住者が 10. 定住意思有の移住決断か 11. 定住意思無の移住決断をする可能性があり、9. 移住前の移住先へのプラス要因があった場合には、10. 定住意思有の移住決断か 11. 定住意思無の移住決断をする可能性が高められる。

図 5-1 と図 5-2、2つの移住に関するプロセスモデルが構築されたのは、1. 都会暮らしの頃に感じていた違和感と 30. 都会への一応の満足というカテゴリーの分類が明らかになったことで、カテゴリーの関連を 1つの図では表現できないためである。

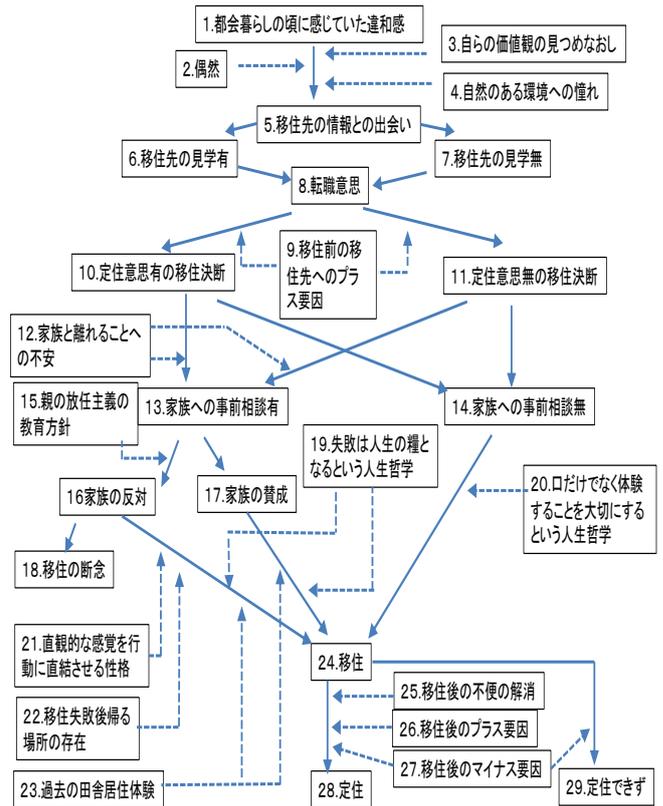


図 5-1 移住に関わるカテゴリー関連図パターン 1

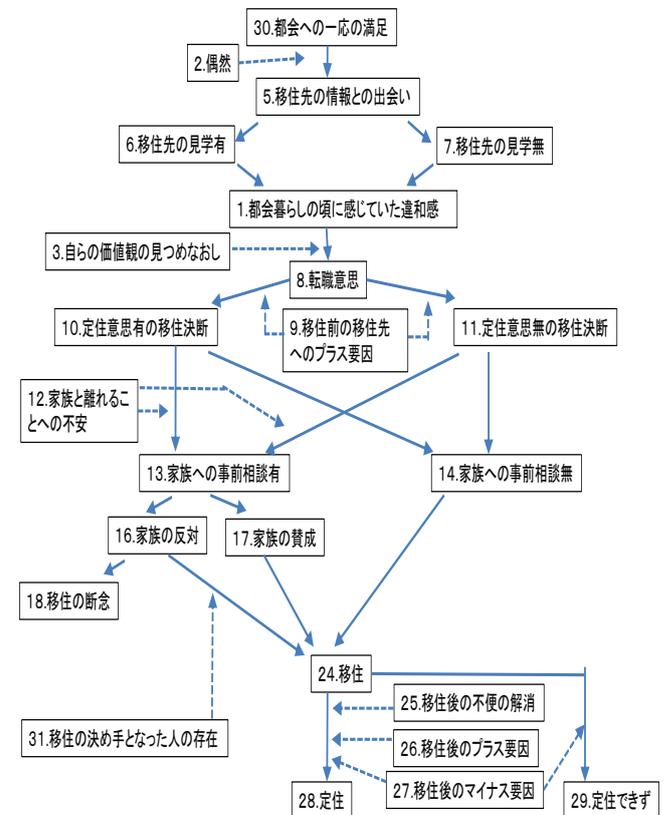


図 5-2 移住に関わるカテゴリー関連図パターン 2

#### 5.4.1 図5-1のストーリーライン

ストーリーラインは、カテゴリー関連図をもとにして、概念（本研究におけるカテゴリー、ラベル）を使って書くもので理論にあたる。

図5-1に属する人は今回の対象者は「I氏、H氏、K氏、M氏、C氏」である。

図5-1において移住者は1. 都会暮らしの頃感じていた違和感を経た後、都会での暮らしに違和感を感じたため、3. 自らの価値観の見つめなおしをする方や、都会の自然の少なさに影響を受け4. 自然のある環境への憧れをもつ方が存在することが明らかとなった。移住者は、その後5. 移住先の情報との出会いに至るのだが、その出会いが移住先を自分の意思で検索していた時に出会った人もいれば、何気ない日常の中での会話や、偶然移住先の就職先に空きができたなど、5. 移住先の情報との出会いには2. 偶然が関わることもあるパターンが存在することが明らかになった。5. 移住先の情報との出会いの後には分岐が発生し、6. 移住先への見学有なのか、7. 移住先への見学無に分岐が発生する。この分岐が発生することから、移住先の情報に対する、念入りな事前調査をする移住者と、調査をあまりおこなわない移住者に分かれることがわかる。6. 移住先への見学有と7. 移住先への見学無、どちらのカテゴリーにおいても次は、8. 転職意思というカテゴリーに至る。移住者が皆転職をすることを決断するのは、移住後、仕事が無ければ生活ができないためである。8. 転職意思の後には、また分岐が発生し10. 定住意思有の移住決断と11. 定住意思無の移住決断に分岐する移住者がいるが、どの移住者も【好きなことにチャレンジさせてくれる第一印象】「I氏」のように9. 移住前の移住先へのプラス要因を感じた人が移住先への移住を決断することが明らかになった。10. 定住意思有の移住決断と11. 定住意思無の移住決断に分岐した移住者はどちらのカテゴリーも次は、移住に関する13. 家族への事前相談有と14. 家族への事前相談無に分岐する。13. 家族への事前相談有のカテゴリーに至る人は、

やはり移住するという重大なできごとであることと、12. 家族と離れることへの不安を抱く人は、家族へ相談するということが明らかとなった。14. 家族への事前相談無のカテゴリーに分岐する人の特徴は今回の調査においてはラベル名の抽出からは発見することができなかったが、話を聞く中で移住時にマイナス要因は無かったのかの質問に対して、ほとんどの方が遠く離れてしまう家族が心配と答える中、家族のことにはあまり触れず、移住先への心配事について多く語っていたように感じた。家族への相談を行った人は当たり前ではあるが、16. 家族の反対を受けると、17. 家族の賛成を受けると人に分岐する。ただ今回の調査ではここで予想外の結果が出てしまう。16. 家族の反対を受けるとしてなぜか、15. 親の放任主義の教育方針という結果がでたことである。普通は放任主義である親であれば、子の意思には賛成をされると考えられる。つまり、今回の結果では、データのサンプル数が少なかった限界によるもので、引き続きデータを集めていくことで15. 親の放任主義の教育方針という特徴を持つ人は、17. 家族の賛成を受けるという分岐になるという風に変化することが予想される。16. 家族の反対を受けた人はその後、18. 移住の断念か24. 移住に分岐する。今回の調査では18. 移住の断念をした人は存在しなかったが、家族の意見に影響を受けた人はこちらに分岐することがわかる。今回の調査では16. 家族の反対から、24. 移住に分岐する人は、19. 失敗は人生の糧となるという人生哲学を持つ人、21. 直観的な感覚を行動に直結させる性格の人、22. 移住失敗後帰る場所の存在がある人、23. 過去の田舎居住体験がある人はこの分岐を行うことが明らかとなった。17. 家族の賛成を受けた人は、19. 失敗は人生の糧となるという人生哲学を持つ人と、23. 過去の田舎居住体験がある人が24. 移住するという特徴を持つことが明らかになった。14. 家族への事前相談無から24. 移住に至る人は20. 口だけでなく体験することを大切にするという人生哲学を持つ人が存在する。24. 移住からの分岐は28. 定住と29. 定住できずに分類される。今回の調査では対象者は皆28. 定住するのだが、この分岐に関

係するのは **25. 移住後の不便の解消**、**26. 移住後のプラス要因**、**27. 移住後のマイナス要因**、である。これらを天秤にかけた時その人にとって、**27. 移住後のマイナス要因**よりも **25. 移住後の不便の解消**、**26. 移住後のプラス要因**の方がより影響を与えたのであれば **28. 定住**に至ることとなるが、逆に **27. 移住後のマイナス要因**が大きく影響してしまう人というのは **29. 定住できず**に至ることとなる。

#### 5.4.2 図 5-2 のストーリーライン

図 5-2 に属する今回の対象者は「S 氏」である。この人の存在によって移住者のプロセスモデルが 2 つに分類されることが明らかとなった。図 5-2 において移住者は、図 5-1 の移住者とは違い、**30. 都会への一応の満足**を経て、**5. 移住先の情報との出会い**に至る、ここでは図 5-1 にも存在した、**【SNS による移住先の情報との出会い】**「S 氏」のように、**2. 偶然**による出会いの可能性が存在する。その後見学の有無の分岐に関しては同じものとなるが、図 5-2 の移住者の人の最大の特徴は、見学の有無から **1. 都会暮らしの頃に感じていた違和感**に至ることである。移住先を見学によって都会への違和感を感じる人もいれば、情報との出会いの時点で都会への違和感を感じる人もいるということがこの分岐からは明らかになった。都会への違和感を感じた人は、**自らの価値観の見つめなおし**をすることで、**1. 都会暮らしの頃に感じていた違和感**から、**8. 転職意思**に至るという流れになる。**8. 転職意思**から先のプロセスの流れというのは、図 5-1 と全く同じとなるが「S 氏」の場合 **16. 家族の反対**から **24. 移住**プロセスに、**【応援したくなった子供達の存在】**「S 氏」というラベル名からわかるように、**31. 移住の決め手となった人の存在**というカテゴリがあるためそのプロセスの流れになることが明らかになった。

### 5.5 構築したプロセスモデルの検証（梶原を対象）

海士町のデータをから構築した移住者のカテゴリの関連図のパターン 1 とパターン 2 が離島と中山間地域でどのような結果になったのかを検証を行う。

#### 5.5.1 T 氏の検証

T 氏は専業主婦の方で、特に都会への不満があったわけ

はないが、夫が梶原町の移住者支援制度を知ったことで、移住を決め、親の反対もあったが、夫の移住への意向が強く、その夫に引っ張られる形で移住をした方である。移住の際夫は、仕事は変えることなく愛媛の勤務先に現在も梶原から通っている。定住を考えて移住して来ていたが、子供が生まれたことによって、田舎の学力が低いことや、先住民の一部の閉鎖的態度など、移住先への不満があるため機会があればまた移住をしたいと考えている。

特に都会に不満があったわけではないので、T 氏は構築したプロセスモデルのパターン 2 の分類に属する。T 氏のカテゴリ間関係を考えていくと、**6. 移住先への見学有**から生じる分岐に **10. 定住意思有の移住決断**への行為として実線矢印が新たに発生することとなる。また **16. 家族の反対**から、**24. 移住**への矢印に対する破線矢印として、夫の強い移住への意向がある人は移住の可能性が高くなることが明らかになった。また定住はしているが、今後の移住意思が存在することから、機会があれば移住するという意思というカテゴリが分類された。

#### 5.5.2 Y 氏の検証

Y 氏は農家で働いている方で、都会でのデスクワークばかりの仕事に不満を抱いていた。農業の研修ができる場所の探索をしていた時に梶原の農家の方の HP を発見し、見学はせずに HP を見た次の日には転職を考えた。農業ということで、不安定な生活になるかもしれないが、生活が困難になるまでは定住を続けることを決めていた。祖父へ移住の相談はし、反対されたが、水のきれいな場所へのあこがれと、安全な食品を作りたいという願望により移住し、移住後は色々な人の助けもあり移住先の暮らしへ満足している。

都会での暮らしに不満があったことから、Y 氏は構築したプロセスモデルのパターン 1 に属する。Y 氏の移住の流れは、構築したプロセスモデルですでに表すことができる。また Y 氏のように食への関心が強い人が、**24. 移住**至る可能性が高くなることがわかった。

#### 5.5.3 O 氏の検証

O 氏は東京で音楽に関係する仕事をしていたが、都会暮らし

しの中から有機農業に興味を持っていたかたです。震災による放射能の影響に不安を抱き、都会を離れ暮らすために、農業に関われる仕事をハローワークで探していた時に梶原の情報と出会う。移住時を決断した際は奥さんに相談した。奥さんはインターネットができる環境があれば仕事はできたので賛成だった。とにかく農業をやりたくて移住し、移住後の不満は数多くあるが、それでも農業という仕事に満足しており定住を続けている。

O氏は都会暮らしに不安を抱いたことで移住を検討しているため、O氏は構築したプロセスモデルのパターン1に属する。O氏の移住の流れは、Y氏と同じく構築したプロセスモデルで表すことができる。またOのように農業に関心が高いひとは、**24. 移住**に至る可能性が高くなることがわかった。

#### 5.5.4 R氏の検証

R氏は良く旅を行う方で、日本国内も海外にも過去よく行っており、海外で有機農業を見た時に有機農業に対して興味をもった方である。旅をするということで、何度かIターンをしていたが挫折した経験を持っている。梶原の情報との出会いは、有機農業ができる場所を探していた時に、梶原の農家の方のHPを見たことによるものだった。そのため自給自足な生活をしたいと思い梶原へ移住をした。またR氏は食への関心がとても高く、その食への関心が高い理由は、親の食に関する厳しい教育によるものだった。

R氏は食への関心が高く自給自足な生活を求めていることから、都会での暮らしではなく、地方で暮らすことを求めている。そのためR氏は構築したプロセスモデルのパターン1に属する。Rの移住の流れは、構築したプロセスモデルですでに表すことができる。またR氏も、Y氏のように食の関心が高かった方なので、**24. 移住**に至る可能性が高かったことがわかる。

## 6 結論

・まず1つ目に、カテゴリ関連図を構築したことにより、移住者が、移住前の暮らしへ満足していたのか、満足していなかったのかの違いにより2つのカテゴリ関連図のパターンが生まれることが明らかとなった。この2つのパターンが生

まれるのは移住前の暮らしへ満足していた方が、見学後、実は自分は都会への満足していなかったということに気づくことによるものだった。

・2つ目に、移住者が移住を考えていない時に、何気ない偶然による情報との出会いによって移住を決定するパターンの移住者がいることが明らかとなった。

3つ目に、また、移住というのは重大な出来事であるにも関わらず、身内への相談もせずに移住を決断してしまう人が存在することが明らかになった。

・4つ目に移住先のことの具体的な事前調査をせずに移住を決断してしまう移住者も存在することが明らかになった。

・そして5つ目に、海士町という離島のデータを元に構築したカテゴリ関連図を用いて、全く環境の違う梶原町という中山間地域で、そのプロセスの汎用性の検証をした結果、今回構築したプロセスモデルにおいて、パターン1のカテゴリ関連図は、梶原の方達にも適応することが実証された。ただ、パターン2のカテゴリ関連図においては、T氏の検証結果において、新たな行為のカテゴリ間が生じる結果となった。このことから、パターン1のカテゴリ関連図には、新たに生まれる行為のカテゴリの関係は少ないということが明らかとなったが、パターン2においては、梶原町の1人の方のデータをまとめるだけで、新たな行為のカテゴリ関係が生じたのでさらにカテゴリ間が生じる可能性がある。このことからパターン1に属する、以前の暮らしに対して満足していなかった移住者の行動のパターンというのは明らかになったといえるが、パターン2に属する、以前の暮らしに満足していた移住者の行動パターンにはまだ様々な可能性があることが明らかになった。

## 引用文献

【1】 BENSON, M. and O'REILLY, K., 2009. Migration and the search for a better way of life: a critical exploration of lifestyle migration. *Sociological Review*, 57 (4), pp. 608-625.

【2】新曜社 “実践グラウン・デッド・セオリーアプローチ” 著者 戈木クレイグヒル滋子 (2008), P6・P101